

「サカタさん、ミジンコって大きくなったらなんかになるの」

この手の質問はよくある。ボウフラなら蚊になるし、青虫はチョウチョになる。赤い糸ミミズに似たユリスカの幼虫はユリスカになる。だから、こういう質問は一般常識として正しいのである。

だけども、ミジンコのように親のサイズでも小さいものは0.5ミリメートル、普通で1~2ミリメートル程度の甲殻類（エビやカニの仲間）はこれで立派な生体であるし、大きくなったらザリガニになるなんてことはない。

しかし、大もとをいえば節足動物門という分類になる。これは哺乳類の仲間である人間が脊索動物門という分類の範疇にあるのと同じことなのだ。



坂田明 著『ミジンコ道楽』より抜粋

ミジンコは親の育囊の中で孵化しても、すぐに外界には出ない。顕微鏡でその様子がよく見えます。

親と同じかっこうをしたミジンコが育囊の中で満員電車の乗客のごとく、押し合いへし合いしながらその時を待ちます。

親が後腹部を持ち上げて、外に出なさいと合図してくれると、次々に自分で外界へ泳ぎ出て独り立ちする。

ま、以上のようなことになるのですが、判りましたかねえ。学校の勉強じゃないし、どうだっていいとなればその通りですけど。